様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　5 月　13 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19720077
研究課題名（和文）　一九四〇年代文学に見る「中国近代」の隘路

研究課題名（英文）　The Dead-End of “Modern China” in the Chinese Literature in the 1940s

研究代表者
杉村　安幾子（SUGIMURA　AKIKO）
金沢大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号：50334793

研究成果の概要（和文）：本研究は清末より大きなパラダイム変換を迫られ、学問や教養といった社会を支える「知」のあり方のみならず、結婚・恋愛に至るまで西欧の衝撃を受けた中国において、一九四〇年代には既にその「近代」の歩みそのものが行き詰まっていたことを個々の文学作品によって検証したものである。その結果、中国現代文学において、新と旧の二つの概念は二項対立的構造を成しておらず、特に文化の新しいありようが、必ずしも現代中国の文人・知識人たちのプラスの精神史へ収斂していかなったことを分析・指摘した。

研究成果の概要（英文）：China has changed in several fields since the last years of the Qing. Especially serious are the changes in culture which include, for example, scholarships, concepts of romance, and forms of marriage. This study explores these cultural changes through analyzing some literary works in the 1940s. The results, contrary to the expectation, indicate that China had already confronted the dead-end in the road to true modernization in the 1940s.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 500,000 | 0 | 500,000 |
| 2008 年度 | 300,000 | 90,000 | 390,000 |
| 2009 年度 | 100,000 | 30,000 | 130,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 90,0000 | 120,000 | 1,020,000 |

研究分野：中国現代文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：中国文学，近代，知識人

## １．研究開始当初の背景

一九四〇年代という時代は世界史的に見ても激動の時代であるが、中国においても間違いなく画期であったと言えよう。例えば抗日戦争における中国の勝利は、結果的には中国の直接的な社会的安定には結び付かず、国共内戦およびそれへの反対運動の全国的な展開といった状況は、当時の国情が却って激しく動揺していたことを示している。そのような状況の下、政治と不可分の関係である文学作品、或いは文学者たちの言説・表現の中からは、読者への明確なメッセージが読み取

れると同時に、文学者たち当人も意図せざる種々のものが表出していたはずである。

中国本国の現代文学研究においては、一九四〇年代文学研究として黄曼君（1987）、黄修己（1987）などの論文がある。前者が抗日戦争・国共内戦を文学および中国人民の生活に影響を及ぼしたメルクマールととらえ、四〇年代の文学がそれまでの現代文学といかに異なるかを分析したものであり、後者は四〇文学研究が現代文学研究における零落期とされていることへの反駁であるが、両者とも総論の域を出ない。また、趙園（1985）は具体的な文学作品を挙げ、中国知識人層の精神性は三〇年代から四〇年代に到る過程においてより複雑で内的矛盾をはらんだものになっていると指摘した。本研究の開始当時、こうした先行研究は現代文学史上大きな意味を持ちつつも、実のところ一九四〇年代研究はあまりなされておらず、更に応募者はこれらが中国本国ならではの研究上の制約を受けていると感じた。それは「知識人層は人民といかに関わるか」という視点から逃れ得ていないということである。

中国の現代文学は「近代中国」の幕開けとともに語られることが多いが、実は文学的には相当早く「近代中国」の行き詰まりが描き出されていた。これまでこの点に着目されることはほとんどなかったと言って良い。この研究視点は視点そのものが今尚中国共産党の独裁色の濃い中国本国にはあり得べからざる、或いはやりづらいものである。その意味では当面のところ、この研究視点は日本が中国にとっての「外国」であるゆえにアプローチし得るものである。これは現在の中国への直接的な批判を意味するものではない。歴史的文脈において文学作品に表出するものをとらえることに応募者は意義を見出している。

従って、応募者はこの「近代中国」の行き詰まりという点に着目し、掘り下げていくことで、上記の先行研究の成果を受け、瑕疵を補い、なおかつより深く斬り込んだ視点を提供できるのではないかと考えた。更に、延いては中国現代文学全般に新たな視点を築くことにもつながると考えたのが、本研究の着想に到った経緯である。

## ２．研究の目的

本研究は一九四〇年代に焦点を絞り、特に中華人民共和国成立直前の文芸界の動向に視点を据えて、中国の文学者・知識人たちがいかにして「新中国」を志向していったか（或いは志向しなかったか）をさぐろうとするものである。それはまた同時に当時の中国において「近代」とは何であったかを考察することにもつながる。

中華人民共和国成立後の中国共産党一党独裁の歴史は、当然のことながら、背景として建国当初の中国人民の共産党への支持の歴史があったことを指摘できるが、当時は共産党への支持だけでなく、懐疑や不審、或いは無政府主義まで存在しており、文学者・知識人たちの失望・逼塞状況もあった。応募者はそうした状況が「中国近代」の挫折や敗北とも受け取れ、それは時代の行き詰まりとも言えるのではないだろうかと考えた。

応募者は本研究において、一九四〇年代文芸界の文学活動・文学系雑誌刊行物・文学作品の中からそうした要素を析出することで、これまで主流であった文学史研究や文学流派研究の大枠においては看過或いは軽視されてきた中国文芸界の底を流れる文学者・知識人たちの「声なき声」を汲み取ることを狙いとした。

課題申請時の主たる具体的目的は次の二点に集約される。一点は文学作品を素材として、それらに表れた中国の時代的特徴と文学状況を明らかにすること。二点目はそれら個別作品に表れた中国の「近代性」を探ること。すなわち当時の中国の文学者・知識人たちが「近代」および「近代化」をどのようにとらえていたかを明らかにすること。その際には特に時代状況に関する批判的・懐疑的言説に注目する。

中国現代文学研究においては、五四運動以降の中国現代文学の萌芽期たる一九二〇年代、発展的展開を見せた三〇年代に対する研究が主流・中心である。一方、一九四〇年代は文学的年代としてはとらえられてこなかったが、本研究はこの一九四〇年代のより多角的・多面的な位置付けにもつながり、中国文学史の空隙をいくらか埋め、当時の文学者・知識人たちの目指していた方向などを明らかにする道筋をつけることにもなると思われた。

## ３．研究の方法

本研究の方法としては、以下の三点を挙げることができる。

(1)資料の体系的・集中的収集

主として申請期間の初年度および二年目は、研究対象とすべき雑誌・文学作品・関連資料および文献の収集といった基礎作業にあてられた。ただし、一般的な雑誌や文学作品は既に収集済みであるため、収集対象は一九四〇年代に関連すると思われる雑誌・個別作品・資料と、日本国内では閲覧収集できない雑誌・個別作品・資料の二種を中心とすることとした。

申請期間の初年度には調査・資料収集のために中国北京を訪れ、中国国家図書館において一九四〇年代の文学系雑誌のマイクロフ

ィルムの閲覧を行なった。
(2)データの整理・統括、資料集・書誌作成
　収集したデータの資料を整理・統括し、申請期間の二年目を中心に、資料集・書誌の作成を行なった。これら資料集・書誌は上記(1)で行なった基礎作業のまとめとなる作業であり、考察・分析を効果的に進めていく上で必要不可欠であると考えられた。
　資料集・書誌は、作家銭鍾書・楊絳の関連および一九四〇年代の他の作家の関連資料が中心となっており、未入手のものについても基本的な書誌情報は押さえ、未入手資料一覧としてまとめられている。未入手資料を入手した場合の情報更新の便宜を考え、これら資料集･書誌はプリントアウトした形はとっておらず、データベースの形式となっている。
(3)資料の精読・考察
　申請期間の二年目および最終年度を中心として、収集した資料・作品の精読を行なった。その際、以下の四点を主要な着眼点として考察・分析を行なった。
　①雑誌の場合、創刊の意図や終刊（廃刊）の過程、政治的・社会的背景。
　②個別の作家の作品の場合、作家が具体的にいつ、いかなる土地で（例えば国民党統治区であったのか、或いは抗戦期の租界であったのか）執筆したものか。
　③毛沢東の「文芸講話」路線に合わせた創作であるのか。或いはそうした政治的意図は含まれないのか。
　④中国の「近代性」がどのように表れているか。例えば、教育観・職業観・家庭生活観・恋愛観・結婚観において。
　上記の四点は本研究における着眼点として相互に連動しており、且つ又今後の中国現代文学研究や一九四〇年代を考える上での新しい視座を提供し得るものであった。中国における「民族」意識や「国家」観などについても深く考察し得る結果となった。

４．研究成果
　本研究は最終的に、清末に西欧の衝撃を受けた中国が、近代化への道を歩み始めてさほど年月を経ていない一九四〇年代において既に文化・社会が一種の閉塞状況に陥っていたことを示し得たことが最大の成果と言えるだろう。それは換言すれば、中国の「近代化」が、旧来の伝統中国という重く厚い壁を乗り越えることができず、浅薄皮相なものでしかなかったことを意味している。以下に、本研究の研究実績となった申請者の発表論文を個別に概観し、中国「近代」の問題点を見ていく。
　申請期間初年度において、申請者は作家銭鍾書が一九四一年に刊行した散文集『写在人生辺上』収録の散文「悪魔の夜の銭鍾書先生訪問」について研究論文を執筆した。これは銭鍾書が西南聯合大学で教授職にあった時期に書かれた散文であるが、上記３．「研究の方法」の(3)の③の着眼点を以て精読・考察した結果、西南聯合大学という大学の存在が銭鍾書および当時の多くの作家・知識人たちに影響を与えていることに気付かされた。西南聯合大学は抗日戦争という特殊事情によって一九三八年に成立し、一九四六年には歴史上から姿を消している短命の大学であったが、戦争を背景にやむを得ず雲南省昆明に拠点を置きながらも、文学活動の面からは豊かな実りの多く見られた陣地でもあった。銭鍾書の散文「悪魔の夜の銭鍾書先生訪問」は小説的とでも言うべきフィクショナルな内容ではあるが、そのような西南聯合大学における作家・知識人たちの姿や文学活動の様を垣間見ることができる。銭鍾書のその後の文学活動との関わりや、同散文集の他の散文にも言及し、銭鍾書の文学面全体からの考察をも加えることで、本論考は独自にこの一篇が論じられることのなかった銭鍾書研究に新たな視点を加えた。
　なお、これは結論ではなく保留とせざるを得なかったが、銭鍾書がこの散文を発表したとされる新聞『中央日報（昆明版)』について、北京・中国国家図書館においてマイクロソフト閲覧による調査の結果、当該散文を『中央日報』中には発見できなかったため、当該散文が発表されたのは『中央日報』ではなく、同時代の他の新聞・雑誌ではないかという示唆を論文中で行なった。当該散文発表当時の銭鍾書の同僚・学生たちの反応を記した資料があるため、当該論文が散文集刊行の際の書下ろしではないことは明らかである。銭鍾書研究のみならず、一九四〇年代の雑誌・新聞研究にも関わる今後の課題となるだろう。
　申請期間二年目においては、銭鍾書が一九四六年に雑誌『文芸復興』に発表した長篇小説『囲城』に注目し、研究論文を執筆した。これは作品論であるが、『囲城』の主人公親子を通して近代中国知識人の実相に迫ったものである。小説の背景となっている一九三〇年代には、科挙を受験した旧式の知識人と、欧米に留学し、最先端の学術・思想を学んだ新式の知識人が同時に存在した訳であるが、『囲城』は旧式の知識人の家父長的な道徳観や狭隘な世界観を批判しているだけでなく、新式の知識人の皮相的な教養のあり方や虚弱且つ浅薄な精神構造をも描き出し、鋭い批判の矢を向けているのである。本論考は、こうした新旧の知識人の描写の中から、著者銭鍾書の、中国における「近代」のありようへの批判を読み取れると指摘した。新旧の二項対立的な視点を用いれば、当時、新式の学術・思想はより良いものであったはずだが、

皮相的な「近代」の摂取は、旧式な世界観をも凌ぐ精神的腐敗に到ることになり、それはとりもなおさず当時の中国の文化・社会が閉塞状況に陥っていたことを示すものでもあったのである。

申請期間最終年度には研究総括として、研究論文を一篇執筆し、研究発表を行なった。研究論文は前年度に引き続いて『囲城』の作品論であり、詳細な作品分析を行なっている。学術面での「近代化」に着眼した前年度とは異なり、本論考においては恋愛と結婚に注目した。『囲城』には恋愛・結婚が幾つか描かれているが、二十世紀初頭から中期にかけての中国においては、恋愛・結婚に対する思考や形式が大きく変容しつつあった。ごく簡単に言えば、西欧の影響を受けた知識人たちは、親が主導する結婚から自由意志への結婚を選択し始めた。また「恋愛」という西欧的概念の導入によって、当時の若き知識人たちは男女の交際における行動様式や言説を一新し始めていた。銭鍾書はそうした恋愛・結婚の変容の過程を、自身の恋愛・結婚を素地として描き出し、知識人を中心に理想とされた西欧的な恋愛や結婚を自嘲してみせた。というのは、『囲城』に描かれた恋愛・結婚で良い結末を迎えるものはなく、結果として本論考は、恋愛・結婚にも中国「近代」の陥穽があったことを指摘した。

日本中国学会における研究発表においては銭鍾書とその父親銭基博の関係について論じた。銭基博は息子ほどには著名ではないが、自身も多数の著書のある学者であり、本国では論文集が刊行されるなど再認識再評価の動きが高まっている。銭鍾書の古文における突出した文才の背景には、父親による厳しい教育・指導があったことを伝記的資料に基づいて確認し、長篇小説『囲城』の中でもそれは主人公親子のあり方として活かされた点を指摘。伝記的事実に基づけば、家父長的支配権を振るう典型的な旧式家庭の父親であった銭基博を、銭鍾書は短篇小説『猫』においても戯画化して描いている。また、銭鍾書の随筆「林紓の翻訳」を素材として、銭鍾書の林紓評価の裏には、銭基博と林紓との確執があったことを確認した。この銭基博の林紓への対抗意識は、後に銭鍾書の周作人批判へとつながる。父子揃って、文学上の大家に果敢に挑んだという、期せざる一致を得たのであった。更に『囲城』に描かれた主人公の旅が、銭鍾書自身の旅の経験に基づいており、そこからは銭鍾書の父への愛憎愛半ばする心情が汲み出せる。このように発表においては、銭鍾書が自身の父親の大きな影響下にあったことを伝記的資料から指摘し、父親を超えようという様々な試みがあったことが、銭鍾書の小説や散文の中に見出せることを論じ、その意味では『囲城』が父親超えを試みた作品であるとまとめた。本発表は現代文学研究者から厳しい指摘・質疑を得た。この発表は、研究費交付最終年度において活字化という成果を得られなかったものの、今後論文を執筆･発表し、本研究の総括的な結果とする予定である。

以上の研究成果を踏まえ、今後の研究展望としては以下のような二つの方向が考えられる。一つは、本研究が結果として集中的に取り組むこととなった作家銭鍾書の作家論的研究である。これについては、本研究の一九四〇年代に関する考察の成果が大きく利する所となるに違いない。銭鍾書は没するまで様々な文章を発表してはいるが、建国後に発表したもののほとんどは学術論文的な内容のものであり、小説や散文の執筆といった文学創作活動を行なったのは、ほぼ一九四〇年代のみであったからである。銭鍾書については、『囲城』の翻訳が岩波文庫から、『宋詩選注』の翻訳が平凡社から刊行されてはいるものの、作家全体像の紹介および作家研究が充分になされている状況とは言えない。本研究が、日本における銭鍾書研究にもつながることが期待される。

もう一つは現代中国の知識人の精神史研究である。清から民国へ、更に中華人民共和国へと時代が移る中で、中国社会の変動には凄まじいものがあった。伝統中国の桎梏と新中国への希求は、常に現代中国を生きた知識人たちの心の内にあったことは間違いない。本研究が示すように、中国の近代化は結果として、括弧付きのものであったかもしれないのだが、激動の歴史の流れにおいて、知識人や作家たちの思想や精神のありようがいかなるものであり、またどのように変容していったかを彼らの文学的営為の中に見ていくことができるだろうと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①杉村安幾子，銭鍾書『囲城』解読２――恋愛と結婚に見る「近代」神話，言語文化論叢（金沢大学外国語教育研究センター紀要），査読無，第 14 号，2010，75-93
②杉村安幾子，銭鍾書『囲城』解読１――「近代」中国のさまよえる知識人達，言語文化論叢（金沢大学外国語教育研究センター紀要），査読無，第 13 号，2009，73-89
③杉村安幾子，散文「悪魔の夜の銭鍾書先生訪問」試論――作家の自己対話と西南聯合大学における銭鍾書，言語文化論叢（金沢大学外国語教育研究センター紀要），査読無，第

12 号，2008，101-121

〔学会発表〕（計　1 件）
①杉村安幾子，銭鍾書と父親「たち」，日本中国学会第 61 回大会，2009 年 10 月 11 日，文教大学越谷キャンパス（埼玉県）

６．研究組織
(1)研究代表者
杉村　安幾子（SUGIMURA　AKIKO）
金沢大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号：50334793

(2)研究分担者
　該当なし

(3)連携研究者
　該当なし